『中国地区英語教育学会研究紀要』No.26.（1996.9.28）

語用論の観点から見た語彙指導の研究
―マルチメディア・ディクショナリーの試み―

比治山大学　馬本　勉

はじめに

英語によるコミュニケーション能力の構成要素として、語彙項目(語・句・構文など[1])の適切な使用能力が不可欠であることは言をまたない。ここで言う「適切さ」というのはもちろん語彙項目が使用されるコンテクストにおいての適切さである。言語使用者には、コンテクストに相応しい語彙項目を選択し、相応しい方法(例えば音調)で自分の意図を伝える能力、あるいはコンテクストに合致した意味理解を図る能力が求められる。本論文ではこうした力を「語用能力」と呼ぶ[2]。

コンテクストと密接に関わる話者の意図を扱う語用論の研究領域のうち、特定の語句が用いられやすい場面特性や言外の意味の問題には語彙的な要素が大いに関わり、ここに語彙指導との接点を見い出すことができる。近年、指導法(例えば Lexical Syllabus, Lexical Approach)や学習辞典において、コンテクストを強く意識した語彙項目の扱いが主流となっている。本研究はそうした流れを受け、コンテクストを伴った語彙項目の提示とドリルによって「語用能力」の向上を図る指導ツール「マルチメディア・ディクショナリー」開発の基本的な考え方(可能性と限界)を議論するものである[3]。

語用論と辞書

1995年に相次いで出版・改訂された学習英英辞典([CIDE],[COBUILD],[HEED],[LDCE],[OALD])では、膨大なコーパスに裏付けられた言語使用の実態分析をもとに、定義(用法説明)やレーベルの中で、話者(あるいは聞き手)の心的態度に関する語用論情報を多く掲載している。日本で出版・改訂が相次ぐ学習英和辞典([College],[Genius],[Global]など)についても同様のことが言える。

用法説明の例では、[LDCE] の "all right" の項に列挙された説明の内の "used when agreeing to do something or to allow something, even though you do not want to" という記述、あるいは [College] の「同意が不承不承の場合も含み、それは声の調子・表情などに現れる」という説明などが挙げられる。レーベルの例では [OALD] "nice" の項の (*ironic*)、[Genius] の [皮肉的に] のような表示は、本来の語義とは逆の心理を表す場合があることを定義・訳語を補う形で示している。また、その語が良い意味で用いられるか悪い意味で用いられるかを区別した表記、例えば [CIDE] の *approving* / *disapproving*、[OALD] の (*approv*) / (*derog*)、[COBUILD] の showing approval / showing disapproval、[Genius] の [ほめて] / [けなして]、[College] の(よい意味で) / (悪い意味で) などは実際の使用の目安として大きな意味を持つ[4]。差別的な語への配慮を示す [Genius] の (侮蔑)、[OALD] の (*offensive*), (*sexist*) などの表示も同様に役に立つ。

説明の形にせよレーベルにせよ、語の伝えうるニュアンスや、場面に適した表現選択の参考に

なる情報は、母国語話者ならば無意識のうちに身につけているのであろうが、外国語学習者が発信のために辞書を利用する場合には「どれほどあってもあり過ぎることはない」(東 1980: 57)と言っても過言ではないだろう[5]。

語用論の観点からみた辞書の用例

辞書の語用論情報に加え、語用能力の向上に不可欠なのが具体的な使用例である。用例は「辞書の生命」(松本ほか 1996: 16)、語彙学習の "integral part" (Fox 1987: 137)とも言われ、その重要性は疑う余地がないが、それは学習者が言語使用のモデルとして模倣の対象とするという一面を持っているからである。学習者は定義よりもまず用例を見ることが多いという調査結果もある([COBUILD]: xxii)。このため辞書の編集の際には用例の採集・選定・作成[6]に格別の注意が払われるが、語用論の観点からはさらに前進させたい点もある。辞書の文字用例には限界があるのである。

まず音声面の欠如が挙げられる。Moon(1987: 95)は、文字コーパスの欠点としてイントネーションの欠如による「意味の特定」の困難さを挙げ、Lewis (1993: 83)も pragmatic meaning を伝える上でのイントネーションの重要性を指摘している。矢印でイントネーションを表記した辞書(例えば[Genius])もあるが、コンテクスト中での語彙項目のあり方を問題にするとき、矢印記号で示すことのできるイントネーションに加え、声の質や大きさ、話すテンポや息づかいなども、重要な音声情報として利用したい。

コンテクストを「言葉を取り巻く全ての状況」として捉えると、言語外情報の重要性を無視するわけにはいかない。顔の表情・姿勢・動作・服装・周囲の状況など、視覚的に捉えることのできる情報で「言葉よりも雄弁」(Stempleski and Tomalin 1990: 4)なものはいくらでもある。コンテクスト中での語彙項目の意味を伝える用例に、こうした言語外情報を含めない手はない。

メッセージの受け手に関わる情報も重要である。発話が相手に与える語用論的な効果を示すには、話者の発話だけでは不十分である。ひとつの用例の情報量をどの程度にするか、すなわち言葉のやりとりをどれくらい多く含めるかという「用例幅」が問題になる。従来の学習英英辞典は(対話例が増えつつあるとはいえ)、現在のところ文単位の用例が多く、学習英和辞典の場合は連結を示す句にとどまっている用例も多い。語用論の観点からは、対話者相互の言葉のやりとりをより積極的に取り上げる必要があると言えよう。

動画用例をめぐって

この節では、以上述べてきた文字用例の問題点を解決する動画用例の可能性を探ってみたい。文字情報のみならず、音声・映像を伴った用例集の作成が普通のパソコンで可能となった今日、筆者は映画の中からマルチメディア・ディクショナリーのための用例収集を続けている[7]。映画は「人間関係に立脚した英語」(新田 1994: 16)の宝庫であり、語用論の観点から用例を集めるのに好都合である上、学習を促進する上で極めてインパクトが強い。

以下で用例の「情報量」をめぐり、「用例幅」(言葉そのものの量的な広がり)、「発話の様相」(コンテクストの質的な広がり)の両面から、音声・映像をデジタル化した動画用例のあり方を辞書の文字用例と対比させながら具体的に検討する。

(a) 用例幅

実際の発話で用いられる語彙項目のニュアンスは、相手とのインタラクションによって醸し出されるという面を持つ。例えば、[COBUILD] の "actually" の項に、次のような定義と例文が与

えてある。(下線部は筆者。以下同じ)

You use **actually** to indicate that a situation exists or happened, or to emphasize that it is true or correct, especially when its existence or truth is surprising. *One afternoon, I grew bored and actually fell asleep for a few minutes... Although she trained as a marine biologist, she actually studied botany at university... Interest is only payable on the amount actually borrowed... The appearance of my body is actually awful.*

定義中の "surprising" の気持ちを感じとるには、辞書例文を読む側にコンテクストの推測力が必要なことが分かる。次に「マルチメディア・ディクショナリーのための動画用例集」(以下単に「用例集」と呼ぶ)から、この語義に相当する例を紹介する。

動画用例(1) *Anne of Green Gables* より

A: That was a delicious dinner, Miss Cuthbert.

B: Oh, thank you, Miss Stacey. Anne actually made this plum pudding herself.

A: Oh, really? Well, I can hardly wait to taste it.

動画用例(2) *Backdraft* より

A: So, what have you been up to?

B: Well, um, I work at City Hall actually.

A: No kidding?

B: No.

A: That's great!

動画用例(1)では "Oh, really?"、(2)では "No kidding?" "That's great!" という相手の反応が示されることによって、"surprising" の気持ちを裏付けている。話し手・聞き手の心理状態を定義中に含める際、用例も相手の反応に言及すべきである。ただ上でも触れたように、辞書利用者に例文からコンテクストを(逆に)推測する力があれば解決する問題でもある。

もちろん相手の反応を辞書の文字用例に追加して用例幅を広げることも可能であり、実際、学習英英(英和)辞典に対話型の用例は増えてきてはいるが、紙面の関係からか十分とは言えない。そこで「用例集」では、全てのエントリーに対する用例を対話型にしたが、単に対話型というだけで全てが解決するというわけでもない。[COBUILD] の "actually" の項から、次の語義と例文を見てみよう。

You use **actually** when you are correcting or contradicting someone. *No, I'm not a student. I'm a doctor, actually... 'So it's not a family show then?' 'Well, actually, I think that's exactly what it is.'*

2つめの例文は対話型ではあるが、やはり辞書利用者のコンテクスト推測力が問われる。同じ語義に分類されると思われる動画用例を「用例集」から拾ってみる。

動画用例(3) *Back to the Future* より

A: Calvin? Why-- Why do you keep callin' me Calvin?

B: Well, that is your name, Isn't it? Calvin Klein? It's written all over your underwear. Oh, I guess they call you Cal, huh?

A: No, actually people call me Marty.

動画用例(4) *L.A. Story* より

A: Hello.

B: Hello.

A: You're on time.
B: Actually I'm late.
A: You're exactly on time.
B: But I had planned to be early.

"actually" の持つ "correcting or contradicting" のニュアンスは、何を否定しているのかという情報が分からないとうまくつかめない。例えば動画用例(3)では、相手(B)が(A)を Calvinと呼び続けており、挙げ句に「Cal と呼ばれているんでしょう」と訊ねる状況が前提となる。動画用例(4)も、(B)の意図とは違う到着時刻だったという情報が必要である。これらは(動画用例(1)(2)もそうであるが)一回きりの応答だけでなく、話し手→聞き手→話し手→聞き手→・・・と続く言葉のキャッチボールが意味理解の上で必要な例と言えるだろう。

言うまでもなく、動画用例(1)〜(4)に含まれる言語外情報は豊富であり、(1)(2)の"actually"を聞く側の発話は驚きの表情と音調を伴っているし、(3)(4)で "actually" を発する側は、やや控えめな様子が見て(聞いて)取れる。この点については次の節でも議論する。

(b) 発話の様相

文字情報だけではコンテクストがつかみにくい場合でも、視聴覚情報(言語外情報)の助けによって容易に把握できる場合がある。例えば [CIDE] の "cute" の項には "charming and attractive" という好ましい意味のほかに、"wishing to seem clever, sometimes in a rude or unpleasant way" という好ましくない気持ちを表す語義と *"Don't be cute with me, Vicki."* という例文がある。この例文の場合、何がどの程度 unpleasant なのか知る由もないが、次の動画用例の場合、ある程度それが明らかになる。

動画用例(5) *Curly Sue* より

A: That was an accident. I'm sure when you got into bed, you scared the living hell out of Curly Sue.
B: Curly Sue? Oh, that's cute! What is she? The lost Stooge?

この発話の直前に話者(B)が Curly Sue という女の子に顔面パンチをくらう場面が映し出され、"cute" と発話する際の顔の表情や音調から、Curly Sue に対する憎々しげな様子がよく伝わってくるのである。

同じ様な例に "clever" がある。[OALD] には "(*infml derog*) quick and sharp with words, in a way that is considered annoying or does not show respect" という定義とともに、*"Do as you're told and don't get clever with me!"* という例文が取り上げてある。この例もcuteの場合と同様、"clever" を発する際の話者の様相がつかめない。これが動画用例だと以下の例のように、相手を "clever" と呼ぶ根拠はもちろん、批判的ににらみつける様子から、annoying の気持ちを推し量ることができる。

動画用例(6) *Anne of Green Gables* より

A: Why did you turn your back on me at the Christmas Ball?
B: Anne, that was over a year ago.
A: It was a deliberate humiliation.
B: And I knew exactly what you were thinking too, Anne Shirley. Look, can we be friends now?
A: Why don't you figure it out if you're so clever.
B: Anne, wait a minute.

こうした用法については「反語的に用いられる可能性の強い語ではそのことを[辞書に]明示すべき」(東 1980: 60)という主張もあり、cut, clever のほかにも fine や nice など、反語用法が一般化した語彙項目については、各辞書がレーベルや説明に紙面を割いている[8]。辞書記述にいたるまで広く認知されていない語は、例文だけのケースもある。[CIDE] "intelligent" はそうした例である。

(humorous) "I've just locked myself out of my car." "That was intelligent of you!"

辞書の用例の役割として「語義説明では十分に表し切れない含意などを含めた記述」(竹林ほか 1989: 30)という側面もあるが、特にコンテクストの影響で微妙な意味を生むなど語用論的に問題となる用法は積極的に取り上げたい。上の文字用例も、コンテクストの理解は容易だが、次の動画用例のようにけんか腰の場面で用いられると、一層皮肉であることに疑いの余地はなくなる[9]。

動画用例(7) *Field of Dreams* より

A: I experienced the sixties.

B: No, I think you had two fifties and moved right on into the seventies.

A: Oh, yeah? Well, your husband plowed under his corn and built a baseball field.

B: Now, there's an intelligent response.

A: The weirdo.

辞書に取り上げられてはいないが、「用例集」に皮肉の例はたくさんある。3つだけ例を挙げてみる。

動画用例(8) *Guilty as Sin* より

(自分を殺人犯として陥れようとする手紙を見て)

A: Here's a copy of the letter she sent to the State's Attorney's Office.

B: Beautiful. According to her, I may as well have taken an ad out in the Chicago Trib.

動画用例(9) *The Assassin* より

(爆破と知らされずに任務を終え、その成果を評価されて)

A: How are you?

B: Just blow up a hotel, how, how do you think I am?

A: Well, everybody at headquarters, especially Kaufman, is, is very happy, and I just thought you'd like to know that.

B: Fabulous.

(8)の(B)は口を歪めて "Beautiful." と言い、(9)の(B)は怒りをこめた表情で "Fabulous." を発する。話者の真意が文字どおりの良い意味でないことは一目瞭然である。上の2例とは逆に、通常悪い意味で用いられる語が、良い意味で用いられる場合もある。

動画用例(10) *Back to the Future* より (石田 1995: 32-33)

(母親の思い通りに育っていないと言う彼氏に)

A: She's just tryin' to keep you respectable.

B: Well, she's not doin' a very good job.

A: Terrible.

この例のように、微笑みながら "Terrible." と言うことで、むしろ相手に対する好意が感じとれる。

以上取り上げてきた反語の例は、いつも逆の意味で用いられるわけではなく、その文脈に大きく左右されるため、レーベルなどによる明示的な説明はそぐわない面もある。また、意味理解を

左右するコンテクストは、視聴覚的な情報を通じて感知される場合が多いことから、動画用例による学習が相応しいとも言えるだろう。

皮肉に伴う発話の様相には慣習的なところがあり、実際のコミュニケーション、特に母国語の場合は「瞬時に理解される」(橋元 1989: 56)と言ってもいいだろう。しかし外国語の場合「微妙な機微が見えない」(新田 1994: 14)場合も多いため、発話の様相を伴った言語体験の蓄積によって学んでいく必要がある[10]。

用例の提示から発信のための練習へ

マルチメディア・ディクショナリーの学習ツールとしての可能性は、デジタル情報を処理するコンピュータの機能に負うところが大きい。具体的には検索が早い点と、繰り返しに手間がかからない点に尽きる。この利点は提示と反復練習で力を発揮する[11]。地道なドリルは「コミュニケーション」の台頭とともに影を潜めてきた感があるが、口頭でのドリルの存在意義は失われたわけではない。Lewis(1993: 159)は次のように述べている。

> 'Feeling' a pattern in the mouth, as well as in the ear and mind is almost certainly helpful, even if we do not know precisely how. Oral drills -- even if involving rigorously patterned single sentences -- should have a part to play.

繰り返し口頭でドリルを行い、暗誦・模倣を続けることの効果は数々の英語の達人が認めている(田邊 1995)。動画用例は最小単位の暗誦・模倣モデルとして大いに活用法が議論されるべきであろう。

語用論の観点からは、口頭練習に次ぐロールプレイ、状況を替えて行うドリルも重要である。対話型の動画用例はそのままロールプレイのモデルとなるが、単に言語形式だけの模倣にとどまらず、音調・表情・ジェスチャーなど、言語外要素への配慮は不可欠である。さらに学習者が新たなコンテクストを創造し、言語外要素を含めた練習が可能である。Lewis(1993: 128)は、

> It may be made more interesting than the traditional drill by asking students to say the same phrase aggressively, confidentially, doubtfully, or even while sucking a Polo mint.

と述べ、同じ表現形式でも声の調子や顔の表情などを変化させ、語用論的な意図を微妙に変えていく練習を提案している。この活動はコンテクストを創造し、その場に適した方法で語彙項目を使用するためのドリルと言えるだろう。

ドリルの対象となる用例収集を学習者の活動として位置づけ、思い出の映画や好きな俳優が登場する映画から収集すれば、学習意欲の向上につながる。自ら集めた用例への思い入れは学習者自身の「学習コンテクスト」を創りだし、根気強く学習を続ける動機づけとなるだろう。

しかし、短く切り取った用例に語用論的な意味の全てを語らせるのは不可能であり、実際の指導に際しては、各自が作品を通して見る、あるいは教師によるコンテクストの補足説明が必要となる。もうひとつ注意すべき点は、マルチメディア・ディクショナリーは発話モデルを繰り返し提示する能力に長けてはいるが、受け身の学習だけでは語用能力は伸びないということである。学習者のねばり強い模倣ドリル、そして「自己流の創造」(田邊 1995: 13)へと発展させることが必要なのである。

おわりに

マルチメディア・ディクショナリーの特徴のひとつは、広い「用例幅」を持った対話式の用例により、語彙項目を常にコンテクストと関連づけて提示することである。これは従来の「単語を

覚える」式の語彙学習からの脱却を意味する。次に視聴覚情報を最大限に活用することにより、用例が**単調**な感じを与えないと言う特徴もある。そして繰り返し視聴し、繰り返し口頭練習を行うためのモデル提示に強いという利点を持つ。これは「あー楽しかった」だけで終わる**淡**泊な学習姿勢を捨てることに通じる。この点は実は、映画を用いた英語指導で最も注意が必要である。映画の魅力は単に「興味を惹く」だけでなく、粘り強い学習へ導くために活用すべきであろう。

この「**単**語」「**単**調」「**淡**泊」を抜け出すこと、すなわち「脱三**タン**」がマルチメディア・ディクショナリーを支える語彙学習の基本原理と言えそうである。

註

1) 語彙指導の守備範囲は単語・熟語にとどまらず、さらに大きな単位を含む傾向にある(Lewis 1993, Willis 1990)。例えば Nattinger & DeCarrico(1992)の lexical phrase のうち、sentence builder と呼ばれる分類には、"not only X, but also Y", "the ...er X, the...er Y" などいわゆる「構文」の概念に近いものも含まれている。

2) 本論文では、"pragmatic competence" のうち、主に語彙項目の使用に関わる能力を「語用能力」と呼ぶ。"pragmatic competence" は "the ability to use language effectively to fulfil intentions and goals"([COBUILD]: xxxiv), "it [pragmatic competence] involves the relationship between particular, conventionalized forms and their associated functions in context."(Nattinger & DeCarrico 1992: 15)といった説明からも分かる通り、言語形式とそのコンテクスト中での機能を軸とした言語使用能力と言うことができるだろう。なお、その能力を研究対象とする pragmatics の訳語として「語用論」を用いることについては、立川・山田(1990: 149)が「発話の単位はいうまでもなく文であり、語ではない」ので「この訳を単語の用い方の研究という感じを与えるがゆえに好まない」と述べ、安井(1988: 144)も、語用論よりは「文用論」「発話用論」の方が好ましいと述べている。しかし本論文においては、pragmatics の観点から語彙指導を論じる関係上、むしろ「語用論」を好ましい訳語として扱う。

3) 本論文では(書籍の形態をとる)紙の辞書を指し示す場合に「辞書」と呼び、コンピュータ上で動画を扱う辞書を「マルチメディア・ディクショナリー」と呼ぶ。

4) 東ほか(1981: 154)は「厳密にいうならば、すべての語はそれぞれの含意をもっているといえるが、基本的なものは人間の持つ好悪・善悪の価値判断であり、言葉遣いでこれを正しく表現とまではいかなくてもせめて重大な取りちがえをしないということは社会生活上の言語使用において必要な条件である」と述べ、LDCE初版の *apprec/derog* 表示を「特に有益」としている。

5) 小島(1994: 149)、村田(1994: 10)も学習辞典での語用論的配慮の必要性を説いている。一方で、語用論情報の記載が辞書の仕事かどうかについては議論の余地があろう。意味理解の約束事を規定したコードとして辞書を位置づけるならば、それを参照し、目の前のコンテクストに応用して求める言語形式の意味を見つけ出すのは人間の役目である。所詮辞書は全てのコンテクストをカバーすることなどできないのだから、語用論情報も不十分な形でしか提供できない、という議論も成立しよう。

特に学習辞典にとっては『新クラウン英和辞典』の編者河村重治郎が「学習辞典のもう一つ大事なことは、学習者が読んでできるだけ抵抗のないものにするってこと。つまり辞書の記述の中にいろんな約束をもちこんじゃいけないってことですよ」(田島 1994: 160)と述べるように、余計な情報はかえって学習者の負担を増すという側面もある。Lewis(1993: 62)も指摘しているが、明示的な説明を通して得た知識は発信能力の向上を必ずしも保証しないという点は一考に値する。

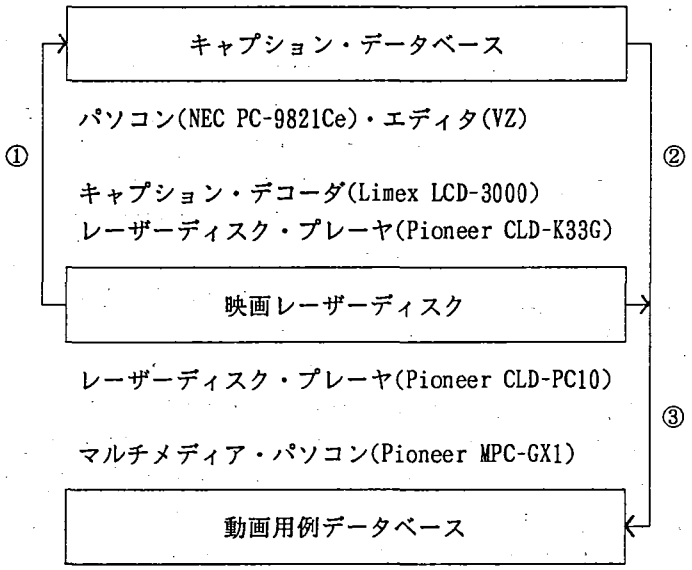
6) コーパスを利用した英英辞典の間でも、もとのコーパスからどのように用例を切り取って

辞書に掲載するかは、辞典によって方針が異なるようである。

"Some examples are taken direct from the corpus; some have been changed slightly from the corpus to remove difficult words; and some have been written specially for the entry."([LDCE]: xvi)

"The majority of the examples in the dictionary are taken word for word from one of the texts in The Bank of English. Occasionally, we have made very minor changes to them, so that they are more successful as dictionary examples."([COBUILD]: xxii)

7) 動画用例の収集は、求める語彙項目を文字データから検索し、動画を検索・保存する方法(①～③)、視聴の際にその都度気になった表現を集める方法(③)の両者を並行して行っている。具体的には①キャプション・データベース(映画のクローズド・キャプションをテキストファイルとしてコンピュータに取り込んだ文字データベース。映画のどのあたりでその台詞が使われたかを示すタイムコード付き)の作成→②キャプションデータベースから任意の語を検索。タイムコードをもとにその語が用いられた場面をレーザーディスクから検索→③前後の発話を含めた動画用例をクイックタイム・ムービーのファイル(1ファイルあたり10～20秒、平均約3Mバイト)としてハードディスクに蓄積、という手順を経る。



なお保存した動画用例の検索は、コンピュータ画面上にアルファベット順に配列したフォルダ(ひとつの語彙項目について複数の用例ファイルを集めたもの)のアイコンをクリックするという単純な方法で行っている。訳語や機能別に見た検索方法も模索中である。

8) 辞書に「皮肉で用いられる」という語用論情報が示されると、その語彙項目を発話や解釈で用いる際の指標にはなるが、皮肉の「痛烈さを失う」(安井 1978: 158)という面は避けられない。その結果、話者が使用を避け、やがては皮肉としての用法は影を潜めてくる、という新たな語用論的現象も起こりうる。この点も明示的な説明の限界として挙げることができようが、どこまで説明をするべきか(辞書に載せるべきか)といった議論を深める必要があるだろう。

9) Grice(1975)流に「(B)の発した"intelligent"という言葉は、真実でないと思っていることを口にしているわけだから皮肉だ」とか、Leech(1983)風に「(B)が"intelligent"と言っていることは相手にとっては礼儀にかなっており、それでいて明らかに真実ではない。従って(B)が本当に

意味していることは、相手にとって無礼なことであり、しかも真実である」といった分析的な思考過程を経て話者の「皮肉」を理解することは希であろう。意味理解のメカニズムを解明しようとするこのタイプの語用論研究を「英語教育に応用」しようとする向きもあるが、実際の言語(特に外国語の)使用能力を高めることと、語用論の公式を覚えることは別であることを我々英語教師は肝に銘じておきたい。

10) 柳瀬(1992: 158)は「学習者は、エピソードによって従属的に感知した地平、問題空間、視線、態度のありように似たものを感じたときにその語彙を使う」と述べているが、明示的な規則よりも良い意味での「あいまいな」経験則の働きを強調したこの主張は、「経験的」に正しいと思われる。動画用例は、ここで言うエピソードを伴った語彙項目の蓄積に一役買うものである。

11) 田邊・馬本(1994: 17)はコミュニケーション能力を高めるための語彙指導がカバーすべき段階として「提示」に続いて「練習」を挙げている。Lewis(1993: vii)は、Present-Practice-Produce から Observe-Hypothesise-Experiment へ学習のパラダイムを転換すべきだと述べているが、必ずしも練習の不必要性を意味しない。

参考文献

Fox, Gwyneth.(1987) "The Case for Examples." in Sinclair. 137-49.

Grice, H.P.(1975) "Logic and Conversation." Cole, P., and J. Morgan. ed. *Syntax and Semantics* 9. New York: Academic Press. 113-27.

Leech, Geoffrey.(1983) *Principles of Pragmatics*. London: Longman.

Lewis, Michael.(1993) *The Lexical Approach*. London: Language Teaching Publications.

Moon, Rosamund.(1987) "The Analysis of Meaning." in Sinclair. 86-103.

Nattinger, James R., and Jeanette S. DeCarrico.(1992) *Lexical Phrases and Language Teaching*. Oxford: OUP.

Sinclair, J. ed.(1987) *Looking Up*. London: William Collins Sons.

Stempleski, Susan, and Barry Tomalin.(1990) *Video in Action*. Hemel Hempstead: Prentice Hall.

Willis, Dave.(1990) *The Lexical Syllabus*. London: HarperCollins.

石田優子(1995)「映画の中で使われる本物の英語について」平成6年度比治山女子短期大学卒業論文.

馬本　勉(1995a)「語用論アプローチとマルチメディア」『比治山大学現代文化学部紀要』1: 57-66.

ーーーー(1995b)「語用論的アプローチによる語彙指導：映画教材の可能性」『中国地区英語教育学会研究紀要』25: 185-95.

小島義郎(1994)「辞書学の成立」大学英語教育学会『第33回JACET全国大会要綱』147-50.

高橋秀夫(1992)「レーザーディスクを利用したマルチメディア型用例検索データベースシステムの開発」『千葉大学教養部研究報告』B-25: 185-96.

竹林　滋ほか(1989)「*Chambers Universal Learners' Dictionary* の分析」岩崎研究会(編)『英語辞書の比較と分析』(第4集) 研究社. 1-84.

田島伸悟(1994²)『英語名人河村重治郎』三省堂.

立川健二・山田広昭(1990)『現代言語論』新曜社.

田邊祐司(1995)「レシテーションのススメ」『現代英語教育』32.7: 12-15.

田邊祐司・馬本　勉(1994)「英語コミュニケーション教育に関する基礎研究(1)」『中国地区英語

教育学会研究紀要』23: 15-30.
新田晴彦(1994)『スクリーンプレイ学習法』スクリーンプレイ.
橋元良明(1989)『背理のコミュニケーション』剄草書房.
東　信行(1980)「辞書と語用論」『言語』9.12: 50-60.
東　信行ほか(1981)「*Longman Dictionary of Contemporary English* の分析」岩崎研究会(編)『英語辞書の比較と分析』(第２集) 研究社. 117-235.
松本安弘・松本アイリン(1996)『英語の名教授』丸善.
村田　年(1994)「最近の英和辞典の傾向」『英語教育』43.3: 8-10.
安井　稔(1988)『英語学と英語教育』開拓社.
－－－－(1978)『言外の意味』研究社.
柳瀬陽介(1992)「語彙教授・指導法の比較と検討：エピソード化技法による語彙指導を中心に」『教育学研究紀要』(第２部) 37: 154-59.
(辞書)
Crowther, Jonathan. ed.(1995[5]) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English.* Oxford: OUP. [OALD]
Higgleton, Elaine. ed.(1995) *Harrap's Essential English Dictionary.* Edinburgh: Chambers Harrap. [HEED]
Procter, Paul. ed.(1995) *Cambridge International Dictionary of English.* Cambridge: CUP. [CIDE]
Sinclair, John. ed.(1995[2]) *Collins COBUILD English Dictionary.* London: Harpercollins. [COBUILD]
Summers, Della. ed.(1995[3]) *Longman Dictionary of Contemporary English.* Harlow: Longman. [LDCE]
河村重治郎(編)田島伸悟(改訂)(1995[5])『新クラウン英和辞典』三省堂. [Crown]
木原研三ほか(編)(1994)『新グローバル英和辞典』三省堂. [Global]
小西友七(編)(1994[2])『ジーニアス英和辞典』大修館. [Genius]
竹林　滋ほか(編)(1995)『カレッジライトハウス英和辞典』研究社. [College]

※本研究は、平成７年度文部省科学研究費補助金(奨励研究Ａ)の助成を受けて行ったものである。